韓国における高校の多様化と高校生の生活

―外国語高校と開放型自律学校の事例を中心に―

比較教育社会学コース　　熊　谷　信　司

Diversification of High Schools and the Lives of High School Students in South Korea
―Focused on a Case Study of a Foreign Language High School and a Charter School―

Shinji KUMAGAI

In the cities of South Korea, general high schools have been equalized by education policy after 1970s, but diversification is proceeding recently. In the former part of this paper we will review this diversification trend, and in the latter we will introduce the case study which was conducted in March 2009. In the case study we visited five types of schools (including three high schools, one prep school, and one elementary school), and the main focus in this paper is on a foreign language high school and a charter school which are the new types of high school in South Korea. Features of these schools and some interview data are discussed.

目　　次

Ⅰ　はじめに

高い大学受験熱で知られる大韓民国（以下「韓国」）においては，後述するように一般系高校の「平準化」など，機会の平等の理念が重視されてきた。一方，近年はいくつか新しい動きが起こっている。本稿では，そうした動きを韓国の高校教育の多様化と位置づけて近年の高校改革の動向を整理する。また，実際の学校訪問調査を踏まえ，特に外国語高校と開放型自律学校を事例として，学校経営と教育の特徴，生徒の声などを検討し，多様化の持つ意味を仮説的に考察する。

具体的には，第Ⅱ章で韓国の高校教育の流れを振り返るとともに，近年の教育改革の動向を整理する。また，高校生の生活状況についても，日本との比較の視点を交えた先行調査・研究から，概要を把握する。第Ⅲ章では，第Ⅳ章以下で扱う事例研究の調査概要を述べる。訪問調査から得られたデータをもとに，第Ⅳ章では特殊目的高校のひとつである外国語高校の事例を，第Ⅴ章では公教育再生の実験校としての開放型自律学校の事例をそれぞれ紹介し，当該校における教育の特徴や，それに対する教員・生徒の声を分析する。以上を踏まえて，第Ⅵ章で，若干の整理と考察を試みる。

Ⅱ　多様化する韓国の高校教育

Ａ　「大学進学段階集中型・国家管理型・一元的選抜システム」のもとでの高校教育

日本では新制高校発足時の「高校三原則」はすぐに形骸化され，それから戦後の日本の高校教育の特徴として語られてきたのは，入学難易度による一元的な序列に基づく学校間の階層構造が成立した点であろう。選抜という観点から見れば，わずかな偏差値の違いに

よって明確に学校が序列化される「傾斜的選抜システム」（竹内 1995）という特徴を持つようになった。

韓国でも，1948年の国家成立後から間もなく，日本の戦後と同様にアメリカ合衆国型の６－３－３－４型の単線型学校モデルを導入し，学校教育が量的に拡大していったが，高校教育の「問題」は日本とは若干違う形で認識されてきたと考えられる。それは，韓国における教育政策のありようと関係している。

韓国においては，急速な進学率の上昇を受け，1969年からそれまで行われていた中学入試を撤廃する「中学入試撤廃・無試験抽選入学制」が実施された（馬越 1981）。しかし，これによってさらに問題は高校入試に移る。韓国の高校は，大別すると，日本の普通科高校に相当する「一般系高校」と日本の職業系専門高校に相当する「専門系（実業系）高校」，および体育・芸術系の「芸体能系高校」に分かれるが，高校入試を緩和するため，都市部で一般系高校の「高校入試平準化」が実施された[1)]。

この平準化とは，激化した高校入試を抑えるために，「高校入試の点を基準として抽選により順次学群内の高校に生徒を配分するものであり，かくして機械的に高校の均質化を図り，序列をなくすというもの」（朴起元 2003:60）である。日本の1970年代の都立高校での学校群制度との比較で言えば，共通する面も多いものの，「⑴高校進学希望者の学校群選択権は認められず，居住する地域によって機械的に進学し得る学校群が決定されてしまう点，⑵国公立高校のみならず，すべての私立人文系高校［＝私立一般系高校］もその対象とされ」た点で異なる（有田 2006:88。［ ］内は引用者補充）。

平準化は1974年度から，まず大都市部に導入され，その後，他の都市部全体へと拡大されてきた。先述したように国立・公立・私立学校を問わず全面的に制度を実施するという，当時の軍事政権ならではの非常に強い中央集権的な改革といえよう。

とはいえ，韓国での大学進学熱は上昇を続けた。そこで，学区の階層性（親の社会階層など）が大学進学実績に反映された結果，少しでも進学実績のよい地区の高校に子どもを進学させるべく引っ越しをする家庭が続出するなど，地域格差は大きな問題となっていった。また，入試規制とあわせて，私教育に対する規制も行われた。1980年代には「課外」（正規授業以外の教育）の全面禁止措置が執られるなどの事態となった（馬越 1993など）。その後，課外については解禁されるが，現在は逆に私教育費が家計に占める割合なども問題となっている。近年では，平均すると中高生の子どもを持つ世帯は収入の約３割を私教育に費やし，また私教育にかけられる費用は親の収入によって差があることなどが指摘されており，たとえば月収が150万ウォン未満の層と，450万ウォン以上の層との間では，子ども１人あたりの平均私教育費は３倍近い差となっている（Lee 2005，チョ・ギョンウォン 2007など）。

このように，韓国では高い教育アスピレーションという現象とともに，平準化政策などにより大学入試に大きなウェイトがかかるようになった。実際の進学率に関するデータを見ておくと，2007年現在，高校から高等教育機関（大学および専門大学）の進学率は82.8％と驚異的な高さである[2)]。上述した高校タイプ別に見ると，2000年から2007年の間の高等教育進学率の変化は，一般系高校では83.9％→87.1％と，数ポイント上昇したとはいえ既にほぼ飽和状態に達しつつあるが，実業系高校も42.0％→71.5％と著しくユニバーサル化しているのがわかる（進学率・就学率関係の数字は，韓国教育科学技術部ウェブサイトによる）。

こうした韓国教育の特徴を，有田（2006）は「大学進学段階集中型・国家管理型・一元的選抜システム」と表現している。

B　平準化の「補完」策としての高校教育の多様化

前節で見てきたような状況の下，韓国では急速な教育の量的拡大に対して平等性の問題（教育機会の平等性，学力水準などの地域・階層間格差の平等性），また一方では大学をはじめとして，国際競争における優越性の向上という課題が指摘されている（チョ・ギョンウォン 2007）。この２つは，ある意味で相反する性格を持っているので，両者のバランスや整合性をどう考えていくかは難しい課題であると考えられる。

そこで，近年の韓国の高校教育改革動向を簡単に整理してみたい（金龍 2009，金志英 2009，Ministry of Educational & Human Resources Development 2007-2008）。

まず問題になるのは，平準化政策という理念と英才教育との関係である。これについては，平準化政策の補完という形で，英才教育を行う学校として，1983年に水原（スウォン）に設立された「科学高校」がスタートとした。

こうした新しいタイプの学校は，1990年代半ば以降，種類や数を増やしていく（表１）。

科学高校や外国語高校をはじめとした「特殊目的高校」（職業系と，英才系の科学高校や外国語高校があ

表１　韓国における高校の多様化（主要なもの）

学校の種類	分　　野	指　　定　　者
一般系高校	一般校	市・道教育監
専門系（実業系）高校	農業，工業，商業など	市・道教育監
芸体能高校	芸術，体育教育など	市・道教育監
特殊目的高校	工業，農業，水産，科学，語学，芸術，体育，国際など	市・道教育監
特性化高校	専門系（職業教育）および一般系（代案教育）	市・道教育監
自律学校	全系列	市・道教育監
英才学校	全系列	教育人的資源部長官（従来の科学技術部管轄）
産業需要型対応高校	職業系	教育科学部長官または教育監
実験校	自立型私立高校，開放型自律学校	教育監の推薦，教育人的科学部長官の指定

る)，特定分野の専門人材育成を目指す「特性化高校」，教育監（日本の教育長に相当）が指定できる「自律学校」，従来の科学技術部の管轄である「英才高校」などが設立された。また，新たなタイプの教育を模索する試みとして，「自立型私立高校」，「開放型自律学校」などの実験校も設置された。特に，特殊目的高校は120校あまり，特性化高校は70校あまりが既に設置されているという（2005年現在)。

ただし，特に科学高校や外国語高校は実態として受験名門校化しているだけだという批判はあり，石川（2005）は科学高校を事例として，その背景と要因を大学受験における優遇措置，地方分権化や平準化政策の改革による科学高校の増設などの面から説明している。

実際，こうした受験エリート教育を行う韓国の高校の姿はマスコミなどでも報道されており，たとえば2007年調査では全米名門８大学の合格率トップ40校のうち，外国の高校が２校あり，その２つがいずれも韓国の高校であったことなどが伝えられている(ニューズウィーク日本版，2008年10月22日号)。

また，生徒のレベル・ニーズにあった教育を提供するとされる「水準別教育課程」の導入も，平準化の負の側面の補完という目的・背景から説明されており(宋 2005)，あくまでも平準化政策そのものは保たれているという前提が維持されている。

しかし，平準化そのものも見直しの時期にさしかかっている。2010年度からはソウル特別市では学校選択が可能になる。一般系高校も大きな変化を目前にしている。

C　学校タイプと高校生の生活・文化

前節まで政策的な動きを概観してきたが，多様化の流れの中で，現実の高校生は学校や学習に対しどのような意識を抱き，進路展望を持ち，日常生活を送っているかという点も重要である。

よく知られるように，韓国の高校生は大学受験に向けて長時間の勉強をしている。時間的な違いのみならず，家庭や塾（「学院（ハグォン)」）などもさることながら，学校においても正規の授業時間以外に，放課後も補充授業や図書室などの自習で夜遅くまで学習する生徒が多いなど，生活の場所という観点からも違いがある。最近行われた国際比較調査でも，韓国の高校生の平日の「学校」での学習時間は，「11時間以上」が無回答者を除く有効回答者のうち約37％となる[3)]（日本青少年研究所（2009）の集計表をもとに筆者が再計算)。同調査における日本の高校生のスコアは，「５時間～６時間未満」＋「６時間～７時間未満」の２カテゴリーで約80％であり（計算方法は前同)，ほとんどが平日における正規の授業時間のみと考えられる[4)]。このように生活時間と居場所の構造などにも違いが見られる。

また，「学力」という観点からは，以下のような指摘もある（鄭廣姫 2003)。第一に，学力の国際比較調査の結果から，学力水準自体は国際的に見て高い水準にあるが，学習そのものに対する興味関心が低い点である。この点では，日本と似たような構造となっている。第二に，日韓でやや異なる点として，韓国では特に学力上位層が少ないという指摘がなされたり，平準化や大学入試などの政策全般が学力問題に関しても批判になっているという点である。

日韓の高校生の学校文化・生徒文化を比較した先行研究では，高校生の学校に対する意味づけも日韓では若干の異同が見られること，また，部活動や学校行事などの学業以外の活動やファン・カルチャーなどの要素が相対的に多い日本の学校に比べて，韓国の学校のほうが学校の機能そのものが学業に特化し，シングルタスク的であることなどが分析されている（藤田・熊谷 2002)。また，同研究では，日本でも従来から学校タイプと生徒文化や進路形成には関連があることが明らかにされてきたことを踏まえ（岩木・耳塚編（1983)

など），学校タイプなども考慮して分析がなされ，学校外カルチャー接触などでは日韓ともに学校タイプが効きやすいが，学校内の適応面などに関しては日本では学校タイプとの連関が強いのに対し，韓国ではその効果が弱いことなどが示されている。こうした知見も，多様化が進むとどのように変化するのか，今後新たな検証が必要であろう。

Ⅲ　訪問調査の概要

それでは，第Ⅱ章で述べたような様々なタイプの学校の実際の姿はどのようなものだろうか。下記のように，ソウル特別市およびその近郊にあるいくつかのタイプの学校等で訪問調査を行った。

・調査時期：2009年３月中旬
・訪問対象校：
　Ａ外国語高校（特殊目的高校，京畿道）
　Ｂ高校（一般系高校，ソウル特別市）
　Ｃ小学校（国立大学附設初等学校，ソウル特別市）
　Ｄ塾（大学受験向け大手予備校，ソウル特別市）
　Ｅ高校（開放型自律学校，ソウル特別市）
・調査の方法[5]：
　学校見学（一部授業観察を含む）
　教員インタビュー
　　（Ａ外国語高校，Ｂ高校，Ｃ小学校，Ｅ高校）
　生徒インタビュー
　　（Ａ外国語高校，Ｂ高校，Ｅ高校）

Ⅳ　特殊目的高校　―Ａ外国語高校の事例―

Ａ　早期英語学習・留学熱

韓国では，高等教育期のみならず，それ以前から留学目的で海外に子どもを留学させるケースも増えており，母子が海外に行き，父親が韓国内に残って仕事をして仕送りをする「雁パパ（キロギ・アッパ）」が問題となるなど（李炫延 2005，小林 2009），海外教育熱や，英語などの語学熱も高い。

学校教育においても，1997年より小学校３年生から英語教育が導入され，教科書に合わせた映像教材も準備されており，教員はこれに沿って授業展開ができる（杉浦 2006など）。今回の訪問校でも，国立大学の附設学校（＝附属学校）であるＣ初等学校（以下，「Ｃ小学校」）で英語の授業を見学することができたので，外国語高校の事例の前に，少しその様子を記述しておく。

今回見学した３年生と４年生の英語の授業は，どちらも週29時間の授業のうち（週６日制），２時間が配当されている。はじめに見学した３年生の授業は，韓国人の教員による授業であった。３月は韓国における新年度なので，筆者らが訪問したのはまだ新年度が始まって間もない時期である。したがって，特に３年生であれば，英語の授業が全く初めてであるはずで，実際，授業内容自体は自己紹介をするようなごく初歩のものであった。しかし，教員は児童に対して多くの指示を英語で出し，多くの児童もそれについていっているように見える[6]。

続いて見学した４年生の授業では，韓国人教員とネイティブ・スピーカーのALTによるティーム・ティーチングであった。カードを使ったゲームをしたり，ロールプレイをしたりと，英語は読み書きではなく，オーラルを中心とした活動に重点が置かれている。

もっとも，Ｃ小学校はかなり特殊な小学校であることは留意が必要である。国立大学の附設学校といっても，選抜を行っているわけではなく，通っている児童は周辺地域に住んでいる住民の子どもである。ただし，Ｃ小学校（のある国立大学）周辺地域は，ソウル市内でも社会経済階層の高い地域として知られており，Ｃ小学校教員の話では，多くの親が既に子どもに英語を学習させているとのことで，このようなハイレベルな授業展開が可能になっている。その地域で全く英語を学習していない児童はどうなのかという問題は考えられ，実際にＣ小学校の教頭も，同じ教室内での子どもの能力差にはジレンマを感じていると述べていた。

このように，一定の余裕を持てる家庭では，将来準備のために早期から子どもに英語学習をさせているケースが多い。英語等の外国語学習が，将来的な学歴獲得や地位達成に重要なものと考えられている面が強いからと考えられる。それでは，次に外国語高校の事例を検討する。

Ｂ　グローバルリーダー育成を目指す教育

Ａ外国語高校は，ソウル特別市近郊の京畿道（キョンギド）のとある都市にある。学校の正面玄関のある建物には，「世界人類のために奉仕する創造的グローバルリーダー育成」という壮大なバナーが掲げられ（この文言は学校のポスターにも用いられている），「Global Top 7 High School」が目標となっている。学科構成は，１学年あたり英語科４クラス・中国語科２

クラス・日本語科２クラスとなっている。

玄関を入ると，ラウンジのスペースがあり，売店としてセブン・イレブンが入っている。校内の施設・設備も充実している。基本的に全寮制のため，親からの送金などを引き出すためのATMも設置されている。また，これは韓国の学校ではおなじみだが，自習室があり，パーティションで隣の机と仕切られた自習用机がずらりと並んでいる。

Ａ外国語高校では，４つの校訓を掲げている。第一に「全人教育」である。月に１回，著名人を招いて講演を行ったり，夏休み・冬休みにはボランティア活動を行ったりしている。また，原則として全寮制という部分も大きいだろう。寮の案内パンフレットには「３年間の自主学習時間に勉強できる最大時間」として「394,200分」という数字が大きく載っているが[7]，同時に学習面以外にも各種の活動があることが強調されている。

第二に「英才教育」である。メンター・システムの導入，放課後学校や，「ORP」（One Research per Person）という，２年次に課される個人研究などのプログラムを導入している。放課後学校は，文字通り放課後の補充授業・学習で，校内の案内を見ると，平日の場合は「放課後学校１」が16時半から18時まで共通講座，19時から20時半まで選択講座，21時から23時半まで教室または自習室で自主学習に参加，という具合である。週末には体育や芸術などのプログラムもある。

第三に，「創造性」である。クラブ数は39部，またクラブ活動は別に放課後活動として外部講師を招いた活動を行ったりしている。また，情操教育として音楽の発表や「ランチ・シネマ」などの取り組みがある。その他，学園祭や，リーディング＆ライティングの指導（入試用エッセイやNIE教育など）などの取り組みを行っている。

そして第四に，「グローバル教育」である。各学科ともネイティブ講師による会話の時間が配当されている（筆者らの訪問の際の案内や説明にも，日本語科の日本人のネイティブ教員が同行してくれた）。また中国や日本への語学研修や，英米大学の集中語学講座の機会を設けている。

実際の教育課程は以下のようになっている。３年間で210単位（１単位は，１学年の半期の１授業に相当）を履修する。教科は大きく普通教科と専門教科に分かれる。普通教科は118単位で，うち56単位が国民共通基本教科（国語や歴史などの各教科や道徳，芸術教科など。主として１年次に履修），50単位が道教育庁・学校選択，12単位が生徒選択となっている。専門教科は82単位で，語学の時間が充当されている。具体的には，専攻語の必修が32単位あり，他に学校選択と生徒選択の時間がある。英語科の生徒は多くが生徒選択の時間，中国語科・日本語科の生徒は学校選択の時間（主として英語の授業）が多い。以上の他に，特別活動と裁量活動の時間が若干ある。

Ａ外国語高校の卒業生の進学先は，韓国内の大学のみならず，ダイレクトに海外の大学に進学するケースもある。たとえば，日本語科の場合，2008年度の卒業生は東京大学，早稲田大学，慶應義塾大学，中央大学などの日本の大学に10名ほどが進学した。

Ｃ　外国語高校での生徒の生活

それでは，Ａ外国語高校の生徒は，自分の通っている学校や学校生活をどのようにとらえているのだろうか。日本語科の生徒の話を聞くことができた。なお，前節で見たように，ハードな学習それ自体への対応はもちろん，他の様々な活動とのバランスの取り方などを考えるため，インタビュー対象者には平均的な１日の生活時間を記入していただいた（図１）。

たとえば３年生男子のA-1くんは，流暢な日本語で回答してくれたが，小さい頃に名古屋・大阪・東京と，日本の大都市３ヶ所に住んでいたことがある。また，A-2さん（２年生女子）も，中学生の時に九州に住んでいたことがある。もちろん，すべての生徒に海外在住経験があるわけではないが，外国語高校ではこうした経験を持つ生徒が集まりやすいことは十分に考えられる。

生活時間を見てみると，原則として寮での生活を送るＡ外国語高校だが，A-1くんは自宅が通学できる圏内にあり，２年生までは寮に入っていたものの，３年生になった現在は自宅に戻り，ソウル市内から通学している。始業前に自習をし，正規の授業後は放課後学習を受け，その後塾に通い，家に帰って深夜まで勉強，というスタイルである。塾通いは週６日に及び，しかも塾の授業のない日曜日も「グループ学習」を受講している。一週間を通して相当な時間を勉強に割いていることは言うまでもないだろう。A-2さんは，寮に住んでいて，授業後はそのまま放課後のプログラムを続けている。

それでは，学校側が喧伝していた各種の勉強以外の取り組みについてはどうだろうか。A-1くんは日本語科の生徒であり，日本語クラブに入っている。クラブ

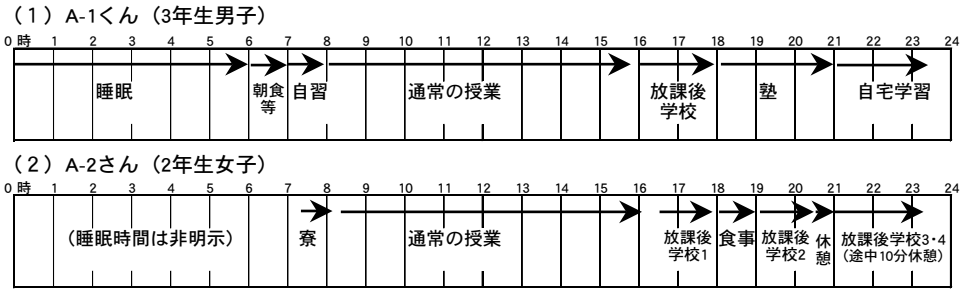

図１：Ａ外国語高校の生徒の１日の生活の様子

の活動日は，日本語能力試験の前などは頻度が高まるが，通常時は２週間に１回程度であるという。これは，日本の学校の部活動の水準からすれば，文化系でも活動頻度は高くないであろう。そうしたことも関係するのか，A-1くんにとって仲のいい友達はやはりクラスの友人ということになる。昼休みに大学や勉強についての話などをするという。また，学校行事で最も楽しいのは学園祭とのことである。日本の中学校の経験のあるA-2さんは，日本の中学校の部活動のような形を韓国にも広めたいと思っている。

そして，このようなＡ外国語高校での生活を経て，進路展望はどうだろうか。３年生のA-1くんは，将来の夢はホテル経営者で，そのために経営学を勉強したいという。日本の大学への進学を目指しており，慶應義塾大学を第一志望に掲げ，その他，東京大学，早稲田大学，明治大学，中央大学といった名前も挙げていた。エリート的色彩の強い学校で，このような毎日を送っているA-1くんであるが，「まだまだ勉強時間は他の友人と比べて足りない」と語っていたのが印象的であった。

Ⅴ　公教育再生への新たな試み
―開放型自律学校（Ｅ高校）の事例―

Ａ　校長のリーダーシップと「自律的」経営への教員の期待

多様化の中で，公教育の再生のモデルという位置づけから，新タイプの実験校として韓国版チャータースクールである「開放型自律学校」が数校設立された。今回訪れたのは，ソウル特別市南西部にあるＥ高校である。

Ｅ高校も校舎は新しく（2009年度現在で開校２年目），施設も充実している。最初に校長から様々な説明を受けた会議室も，大型液晶テレビのついた立派な部屋であった。自習室もあり，またその入口には，IDカードで入退室を管理し，保護者にもメールが届くシステム（日本の塾などでも見られるシステム）が作られている。屋上にもちょっとした庭がつくられているなど，環境構築には力を入れているようだ。

開放型自律学校は，どのような点がこれまでの学校と比べて「自律」的なのだろうか。学校運営のあり方としては，まず校長自身も公募で選ばれ（公立の開放型自律学校の場合），校長に強力なリーダーシップが委ねられる。そして，資金の調達，教員の採用，教育課程の決定権（国民共通基本教育課程以外のカリキュラム）など，多くの部分が校長裁量となる（金志英2009）。

校長のＨ先生は，語りかけるときも笑顔を絶やさず，しかし時に言葉に力を込めて，かなり長時間にわたりエネルギッシュかつパフォーマンス性も十分にプレゼンテーションをこなし，こうした校長のリーダーシップの一端を垣間見たような気がした。

上述のように，開校２年目のため，まだ１・２年生のみしか在籍していない。学校経営の目標に「Supreme School」を掲げ，教育目標には「全人教育」としての3C（Competence，Character，Commitment）の実践を通して，授業実践や生徒指導が計画され，グローバルリーダーの育成を目指すとしている。また，「学びの共同体」づくりのために，生徒・教員・保護者・地域代表者が集まって問題を話し合う「教育フォーラム」が年２回実施されるなど，学校経営上も学校・家庭・地域との連携を図るべく，様々な取り組みが行われている。

教員も自ら志望して校長に採用されているが，どのような思いをもって開放型自律学校という新しいタイプの学校に来て，また現在までの状況をどのように評価しているのだろうか。ここでは３人の教員（E-1先生（女性），E-2先生（女性），E-3先生（男性））の話

を聞くことができた。

Ｅ高校への志望理由は「Ｅ高校は自由に動ける。もっと積極的に学校経営に関わりたいと思っていた」(E-1先生),「新しく始めるという雰囲気があり，指導の仕方が自由である」(E-3先生）など，教員としてもこれまでより自主性が発揮できると期待していた様子がうかがえる。

最初の４年間で一旦成果を評価される実験校としての開放型自律学校については,「今後，肯定的評価をもたらし，仮に開放型自律学校という名前でなくなったとしても，広がっていくのでは」(E-3先生),「10数年のノウハウのある近所の進学校もうちの学校を見学に来ており，モデル提示の影響力はある」(E-2先生),といったように学校経営には肯定的な評価を述べている。E-1先生も「従来校は新しいことを言い出しにくい雰囲気があったが，失われた情熱を再認識できた」と評価する一方，仕事は多く「私生活はやや犠牲になっている」とも述べていた。E-3先生によれば，定時の勤務時間は８時から16時だが，７時から23時まで学校にいることも多いという。高い熱意や希望を持って志望してきた教員たちとはいえ，長期的に見た場合にはバーンアウトなどにつながらないか，また，家族の理解・協力が得られるかといった点などは懸念材料ともいえるだろう。

Ｂ 「普通の」生徒の入学後

形態上はＥ高校は通常の公立高校のひとつと位置づけられており，入学してくる生徒も学区内の中学校を卒業した，いわば「普通の」生徒たちである。とはいえ，学校は選択できるので，生徒たちはまだ実績もない新タイプの学校に何を期待して入学し，現実の学校生活をどのように意味づけているのだろうか。

おおむねどの生徒も，新しい学校ということで，その設立理念などの情報を中学生の時に知って志望しているようだった。「中学生の時，自分はあまり勉強ができなかったので，高校ではやらなきゃと思っていたが，この開放型自律学校の理念を知って，ここだと思った」(E-5くん，１年生男子),「通学に便利だったのと，人格尊重という開放型自律学校の理念を知って」(E-6さん，２年生女子）といった声があった。

もっとも，中学校教員の間では認知度のばらつきや不安要素もあるようだった。「中学の先生は知らなかったが，母親がＥ高校のことを知っていた」というE-4くん（２年生男子）や,「中学の先生からは（新しい高校に進学することに）責任は持てないと言われたが,（入学してみると）一期生にかけるＥ高校の先生たちのプレッシャーは強かった」(E-5くん）などのケースである。今後は，時間の経過という要素のほか，第一期生が卒業を迎えた時の進路（受験）状況などによっても，認知や評価が変化していく可能性があることは考えられる。

学校生活に関しては，上述のE-5くんの発言以外にも，教員の熱心度に対してかなり印象深く思っている発言が聞かれた。たとえばE-4くんは「中学校の頃は情報がなかったが，先生たちが熱心で満足」，E-6さんは「かなり中学と違う。先生たちには満足している。学習方法などもわかってきた」と答えている。これは，同じ公立高校でも，今回の訪問校のひとつである，通常の一般系高校のＢ高校と比べても特徴的である。Ｂ高校でも，たとえば教員と良好な関係を築いていて，教員ともメールをやりとりして相談したり，食事をしに行ったりすることもあるという生徒はいたが，Ｅ高校の場合は学校全体としての指導の熱意がすぐに想起されるようである。前節で述べたＥ高校の教員の話とあわせても，そのような熱意ある教員が志望して勤務しているのだから当然という部分もあるが，学校経営の取り組みが生徒に浸透しているとも言えよう。

学習については，はじめは「How to Study Program」と呼ぶ取り組みをしており，Ｈ校長が言うには「じっと座っていることから始める」というものである。寮[8)]に住むE-7さん（２年生女子）は「夜間自律学習が夜10時まであるのは，初めはきつかった」というように，長時間の学習習慣をつけるというのも最初は大変な作業であろう。しかし，進路や将来目標については，各生徒とも１～２年生でありながら，それぞれの希望職業や進学したい大学・分野を明確に語ってくれた。

こうした進路・目標に対して，Ｅ高校の教育はどのような意味を持つと考えられるのだろうか。学習面などの効果のほか,「自分の住んでいる地域は貧しい地域なので,（学費の面で）助けになる」(E-4くん),「Ｅ高校に来なければ，塾で高い費用を払わなければならなかった」(E-7さん）など，進学準備に関して経済面での不利さを乗り越えられるものとしての期待の声も見られた。

他に「全人教育」のために様々な行事や取り組みがあるはずだが，実際に生徒自身からどのような活動が挙がってくるかを確認したところ，講演会，リーダーシップ・トレーニング，奉仕活動，寮の大きな部屋にクラスメートが宿泊する体験，何かあった際に相談す

る部署，といった活動や組織が挙がってきた。一方，生徒指導が厳しい，という意見も挙がってきた。部活動についても存在するが，Ａ外国語高校の節でも触れたように，活動日は日本の部活動に比べると非常に少なく，日本的な意味での部活動とは質的に異なるものと考えたほうがよいだろう。

生活時間については，通常授業後に補充授業，そして夜間の自律学習を行っており，非常に学習時間は長いものになっている。

Ⅵ まとめ

本稿では，特に1990年代半ば以降進行している韓国の高校教育改革について，平等性と卓越性とのバランスをはかりつつ行われてきた政策の流れを踏まえつつ，多様化へと向かっている様子を概観した。

その上で，主として外国語高校と開放型自律学校を採り上げ，学校経営や教育の特徴やそこに通う生徒の姿を，訪問調査から得られたデータをもとに，事例的に素描した。

それらを踏まえて，若干の考察を行いたい。

まず，特殊目的校などの数が増えていくと，将来的に大学進学を目指す生徒の場合も，高校進学の時点で，特殊目的高校などに進学するか従来型の一般系高校にするかといった選択を迫られるケースが増えてくるだろう。また，これまで都市部では一般系高校は平準化されてきたが，先述したようにこれからソウル特別市では平準化が緩和され，通常の一般系高校でも学校選択という問題が生じてくる。

こうした意味で，生徒たちにとっては主体的に学校を選んだり，自分のやりたいことを考える契機につながったりすることもあるだろうが，その反面，多様化には避けられない問題として，分化や格差の問題にも取り組んでいくことが政策・実践的には大きな課題にもなるだろう。ソウル特別市内の一般系高校であるＢ高校の教頭は，自校の状況は，市内の外れにあって学力や親の経済的には市の全体平均をやや下回ると説明した上で，2010年を「学校の危機」と位置づけている。学力対策としては従来から放課後学校に力を入れてきたが，現在は学校選択に備え，地域の中学校に広報活動も行っていると述べていた。また，Ｂ高校の他の教員は，学校選択の結果，「学力そのものより，第一志望でない子どもが集まった場合のほうが問題」と述べていた。こうした場合，学校文化・生徒文化にも，従来とは違った力学が働く可能性も考えられるし，そもそもどの高校に進学するかという時点で，その後の進路などについて予期的社会化が起きやすくなる可能性も指摘できる。

一方，そうした分化・格差に対して，公教育再生という観点からの実験として，開放型自律学校の取り組みも概観した。現在のところ，Ｅ高校は設立から順調にローンチをしたように見える。理念通り，校長のリーダーシップのもとに教員たちが学校を「つくり」，生徒たちにもその熱意が伝わっているように見受けられる。また，冒頭で指摘した（私）教育費の負担という問題に関しても，学校で受験勉強などの準備が十分にできれば，費用が抑えられて助かるという生徒（を通じた家庭）の声も見られた。

もっとも，このような軸で見ると，外国語高校（のような特殊目的高校）と開放型自律学校は理念的にも対立したものに見えるが，必ずしもそうではないだろう。一見，別個の理念で動いているようでもあるが，それぞれの学校の箇所で述べたように，どちらの学校の教育理念にも「グローバルリーダーの育成」「全人教育」といった文言が登場している。Ｅ高校のとある教員は，全人教育に関して「入試と人間教育は別々のものではなく，一緒のものと認識している」(E-1先生)と発言していたが，そうであれば，最終的に想定されている人間像（すなわち韓国社会で求められている人材像）は，どちらも同様なものである可能性がある。

この点についてはより厳密な議論が必要だが，ここでは，そうであるとすれば，Ｅ高校のような新たな学校づくりの実験的な取り組みの評価も，最初の卒業生が出た時に結局のところ大学受験結果の状況が大きく左右してしまうといった逆説的な可能性も考えられるのではないかという点を挙げておく。

さて，そうした中，高校生たちは学校タイプを問わず，長い時間の勉強にコミットしている。学校の多様化それ自体は，受験勉強への体制に変化をもたらすことはないわけで，むしろ学校選択がこれまで以上に重要な意味を持ってくる可能性もある。その意味で，これまで以上に，大学入試をはじめとしたアウトプットのみならず，どのような学校において，どのような生徒がどのような高校生活を経ているのか，そのスループットに着目する必要性も高いと言えるだろう。

最後に，本稿の限界と課題を挙げておくと，第一に，学校訪問に関しては，ごく限られた時間で各対象校の一部を垣間見たに過ぎないし，その中でも本稿は，事例として採り上げた学校の教育理念や実態と，生徒の学校（生活）に対する反応に関する部分を中心として

概観したに過ぎない。第二に，対象とした学校についても，冒頭で指摘した韓国における地域性の問題や，今回の調査で見ることのできなかった他のタイプの学校の様子を踏まえることは十分にできていないので，こうした点も今後補って検討していく必要があるだろう。第三に，インタビューに関しては，対象となった生徒は各校に一任して選んでいただいたため，代表性を持っているとは担保できない。学校や日常生活，進路展望などについての質的な側面の分析を進めるとともに，量的な検証や，日本などとの比較もなされるべきだろう。

（指導教員　苅谷剛彦教授）

〈付記〉

本稿における韓国での訪問調査は，東京大学大学院教育学研究科・学校開発政策コースのゼミ「学校経営実践の開発Ⅳ」（2008年度冬学期開講）の一環として実施されたものである。担当教員の勝野正章准教授，対象校との調査交渉をメインに行ってくださった金志英氏（東京大学大学院教育学研究科・学校開発政策コース博士課程），ならびにデータ収集・集約や報告会の議論を通して本稿の考察に示唆を与えてくださったゼミ受講者の皆様に御礼申し上げる。

〈引用文献・URL〉

有田伸 2006,『韓国の教育と社会階層　「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版会。

チョ・ギョンウォン 2007,「韓国教育の成功と挑戦課題」『関西文化研究』10，35-60.

鄭廣姫 2003,「韓国の教育改革と教育三法」『日本教育政策学会年報』10，50-66.

藤田武志・熊谷信司 2002,「学校生活と生徒文化」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学　教育からみる日本と韓国』東洋館出版社，131-153.

石川裕之 2005,「韓国における才能教育制度の理念と構造　―「英才教育振興法」以後を中心に―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』51，114-127.

岩木秀夫・耳塚寛明編 1983,『現代のエスプリ No.195　高校生　学校格差の中で』至文堂。

金志英 2009,「韓国の人文系高校多様化政策の現状と課題」東京大学大学院教育学研究科学校開発政策コース「韓国学校訪問調査報告会」発表資料（2009年５月９日）。

金龍 2009,「韓国の高校多様化政策」東京大学大学院特別講義資料（2009年２月５日）。

小林和美 2009,「「キロギ・アッパ」になった韓国の父親たち　―「早期留学」についてのインタビュー調査から―」『大阪教育大学紀要　第Ⅱ部門（社会科学・生活科学）』57(2)，1-18.

李炫姃 2007,「バイリンガルを目指す早期留学支援の現状　―韓国における「雁パパ」の意識から―」『桜美林言語教育論叢』３，115-126.

Lee, Chong Jae 2005, “ Korean Education Fever and Private Tutoring”, KEDI Journal of Educational Policy, 2(1), 99-107.

ニューズウィーク日本版 2008,「韓国が生んだ超進学校」2008年10月22日号，53。

朴起元 2003,「韓国の高校改革と平準化政策 ―学校と地域社会とのパートナーシップおよび高等教育との連携に関する事例研究―」『生涯学習研究年報』９，53-98.

宋美蘭 2005,「韓国の「国民共通基本教育課程」における『水準別教育課程』の実施過程分析　―「平準化地域」と「非平準化地域」の教育庁における実施過程の事例分析―」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』96，275-299.

杉浦正好 2006,「韓国の小学校では英語の授業がどう展開されているのか？ ―担任主導の英語教育―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』９，169-176.

竹内洋 1995,『日本のメリトクラシー　―構造と心性―』東京大学出版会。

馬越徹 1981,『現代韓国教育研究』高麗書林。

――― 1993,「韓国の高等学校改革　―課題と展望―」『中等教育研究』４，17-22.

Ministry of Educational & Human Resources Development 2007-2008, “Education in Korea 2007-2008”, http://eng.kedi.kr/09_edu/img/GeneralInfo/Education in Korea 2007-2008.pdf（2008年12月２日アクセス）

韓国教育科学技術部 2009,「주요 교육 통계（主要教育統計）」, http://www.mest.go.kr/me_kor/inform/science/science/general/index.html（2009年９月４日アクセス）

日本青少年研究所 2009,「中学生・高校生の生活と意識　単純集計結果」, http://www1.odn.ne.jp/youth-study/reserch/2009/tanjyun.pdf（2009年９月９日アクセス）

〈注〉

１）当時の一般系高校は「人文系高校」と呼ばれていたため，正式には「人文系高校平準化措置」である。

２）進学率が90％強であるので，「就学率」としても約70％となる。

３）韓国の回答者の学年別分布は１年生36.6％，２年生48.2％，３年生15.2％で，学校タイプ分布は一般系高校71.4％，実業系高校28.6％である（総回答者数は1,143人）。

４）日本の回答者の学年別分布は１年生41.9％，２年生36.0％，３年生18.0％で，学校タイプ分布は普通高校91.6％，総合高校8.3％である（総回答者数は1,210人）。

５）インタビューについては，インタビューイーが韓国語で回答した場合には通訳を介していること，また場合によってはインタビューイーが外国語である日本語で回答しているケースもあり，本稿では一言一句を厳密に引用・翻訳する形式ではなく，引用者が内容を要約しながら提示することとする。

６）教員の英語による指示の例として，ロールプレイをする際に「Boys, you are going to be Zeeto. Girls, you are going to be Mina.」，あるいは発言の声が小さかった児童に「Please say louder. Make your voice louder.」などのものがあった。仮に実際に英語として理解できなくても，児童は状況やノン・バーバルなサインによっ

て指示された文脈がわかることもあるだろうし，教員側も単に英語による指示を身体化させるという目的もあるかもしれないが，いずれにしても初習者には高度な英語であろう。

7）これは，6,570時間すなわち3年間（1,095日）×6時間という数字である。

8）E高校は基本的には自宅からの通学がメインだが，一部の生徒のために校内に寮が用意されている。